INTERNATIONAL MRA ASSOCIATION OF JAPAN

IMAJ ニュース NO.73

(社)国際MRA日本協会機関誌

発行年月日　1994年3月31日
発　行　所　㈳国際MRA日本協会
〒113 東京都文京区千駄木5-49-2
ベガハウスミタケビル102
TEL.03-3821-3737
FAX.03-3821-6479
発　行　人　住友 義輝
頒　　価　1部200円

●世界家族の仲間入り　●信頼できる人との出会い　●新時代に必要な情報　●心身の健康　●問題解決の秘訣

MRA国際会議レポート

―第17回MRA日本キャンペーン―

「新しい時代の潮流を作るために」

◇世界に平和をもたらすために私たちにできること
◇政治と社会の浄化を進めるためには何が必要か

期間：1993年10月22日～30日
場所：小田原、浦和、東京他

新しい変化を求めて熱心に語り合う

去る十月二十二日より三十日にかけて、第十七回のMAR日本キャンペーンが、『新しい時代の潮流を作るために』のテーマの下、新装なったアジアセンターODAWARAでの国際会議を皮切りに、浦和、東京等で行われた。

小田原会議には、フィリピン、マレーシア、ミャンマー（旧ビルマ）、韓国、そして台湾からの海外ゲストに加え、ノルウェー、イギリス、アメリカ、バングラデッシュ、そして中国などからの在日外国人ゲストをも含めた七十余名が参加し、三日間に亘って熱心な話し合いが行われた。

「冷戦の終結以後、世界は大きく変わってきている。クリントン大統領は『チェンジ』を唱え、細川首相は『変革』を提唱している。今、新しい変化を求めている人は多く、皆さんもここに問題の答えを求めて来られていると思うので、ぜひ、何かを得て帰って頂きたい」との住友義輝弊協会会長の開会挨拶に続き、フィリピンで旅行社の副社長を務めるビッキー・カルマ夫人は次のように述べた。

「今年の夏、香港で開催されたMRAアジア・太平洋青年キャンプに自分の孫たちが参加して、とても変わった。アジアの色々な国の青年と会う中で、新しい人生の意義を見出したようだ。それまでは、議員や金持ちの息子たちの仲間と共に、遅くまで外で遊び回っていたが、今度は彼らを自分の家に連れてきて、両親たちと共に時間を過ごさせるようになるなど、彼らに違う形で心を遣うようになった。欲しい物が簡単に手に入るが、一方で自分から何かを与えよう、分かちあおうという気持ちに欠ける現代の若者たちも、自分を

▽主な内容△

MAR日本キャンペーン・レポート――1P
「新しい時代の潮流を作るために」
（分科会報告）地球防衛協会　大森覚道――7P
「来るべき新しい時代に必要な基本理念」
「生きるということ・・・」――9P
――新成人へのメッセージ――
川口昌宏
台湾選挙浄化運動を取材して――11P
松下政経塾研究員　小野寺五典

超えたもっと大きな生きる目的を求めている。フィリピンだけでなく世界中の若者に、誰かがそれを示してやる必要がある。この『新しい時代の潮流を作る』というテーマこそ、若者にピッタリするものであり、自分たちの人生は既に限られたものではあるが、力を尽くしていきたい」。

続いて、夫のダンテ・カルマ氏は、来日する三日前まで訪問、滞在していたという南アフリカについて触れ、「現在、黒人と白人が共に和解を目指しているが、まだまだ問題は多く、助けを必要としている。是非皆さんも南アフリカのために一緒に祈って欲しい」と訴えた。

●開会式で挨拶する住友義輝弊協会会長

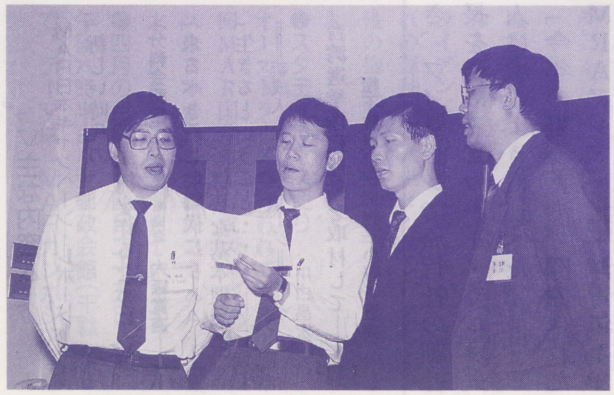
日本はアジアにもっと目を向けてほしい

次いで、マレーシアでMRAの専従として働いているパトリック・サンタマリア氏が自作の歌を歌った後、次のように述べた。

「一九七七年に高校を卒業した後、七年の間に六回職を変えた。これは、仕事の満足度からというよりお金のためであり、当然幸せな生活にはならなかった。一九八八年にオーストラリアでMARスタディーコースに参加し、そこで人々のために奉仕しようとしている人々と出会い、また、MRAの正直、純潔、無私、愛という道義標準を知った。心の声に耳を傾け、得た考えを書き取るという実験を、そこで始めた。最初に得た考えは、母に謝るべきというものだった。父はポルトガル人を先祖とし、ヨーロッパ系の顔立ちだったが、母はフィリピン人でアジア系の顔立ちだった。どうしてもっと父のように、ヨーロッパ的な顔立ちに産んでくれなかったのかと母をいつも責めていたのだった。得た考えに従って、母に託び、愛していると伝えた。また、同様にして、以前働いていた時にごまかして自分の懐に入れていたお金を、その経営者に返すと共に謝罪し、彼からとても感謝された。

この心の声を聴くということを今までずっと試みてきた。日本に来る少し前にも、心に響く声に従って、一年半前から借りたままにしていた本の持ち主に

●フィリピンのビッキー・カルマさん（右）


●一緒に歌を歌う台湾と中国の参加者たち。左から二人目が台湾の張清江氏

●マレーシアのパトリック・サンタマリア氏

返し、『恐れと罪悪感から今まで返すことができずに申し訳なかった』と電話した。

静かな時間を持ち、心の声に聴き、それを書き取り、得た考えを行動に移すことにより、自分の人生が変わった。これこそが、新しい自分が育つための潮流を起こす源になっている。今回のような会議を通して我々一人ひとりの中に生まれる様々な内なる潮流こそが、自分の人生の目的や方向を示してくれるものであり、社会に役立つものとなることを信じている」。

同夜開かれたミーティングでは、台湾でやはりMRAの専従として働いている張清江氏が次のように述べた。

「一九八五年に台湾のMRAの劉仁州氏がこの小田原会議に参加し、上海出身の在日中国人の青年と会った。初めは二人とも神経質になり緊張していたが、会議の終わる頃には互いに打ち解け、その後も連絡を取りあった。昨年、その上海出身の彼が、劉氏を初め、MRAのアジア人のグループと上海の青年団体が交流できるようアレンジしてくれた。●して今年の九月、台北の師範大学のMRAの活動を歌を通して伝えているシングアウトのグループの四十名程の学生を含む五十余名の青年が、同様のアレンジで上海に迎えられ、五日間の滞在期間中に、三回の公演を行ない、上海の学生との交流を行なった。来年以降も、中国各地を訪れて、青年たちとの交流をさらに盛んにしていきたい。このような交流が生まれるきっかけを与えてくれたのが、この会議であり、開催してくれた日本の皆さんに感謝したい」。

続いて、北京から来日し、日本で現在研究活動をしている中国人の参加者は、「日本の倫理・道徳・社会教育について学んでいるが、この成果を中国のために役立てたい。今、中国では生活水準は向上しているが、環境は悪化しつつあり、既にイタイイタイ病が発生している。環境問題の解決には、政府の力や法律も勿論必要だが、同時に国民の教養と価値観を高めることが重要である。自発的に環境を守るという意識なしには解決はできない。このMRA会議を通し

一九九三年の主●活動（国内・海外）

	国内	海外
一月	●関西月例会「政治改革」（講師　住友電気工業相談役　亀井正夫氏） ●東京月例会「信頼される政治と国民の責任」シリーズ③（講師　日本新党参議院議員　寺澤芳男氏）	●インド国際会議
二月	●第十八回通常総会 新春ダイアローグ（ゲスト　松下政経塾研究員　小野寺五典氏） ●関西月例会「精神医学とMRA」（講師　医学博士　阪本正男氏）	●第十九回国際青年スタディーコース（インド） ●MRA南米キャンペーン（ブラジル、パラグアイ、アルゼンチン）
三月	●第二十四回コー円卓会議ミーティング ●関西月例会「美しい地球を子供達に」（講師　地球村運動代表　高木善之氏） ●第二十五回コー円卓会議ミーティング	●MRAプノンペン国際セミナー（カンボジア） ●ヨルダン・イギリス青年交流プログラム（イギリス）
四月	●コー円卓会議中間会議東京プログラム ●関西月例会「カンボジア報告」（弊協会専務理事　藤田幸久）	●コー円卓会議中間会議華南プログラム（中国） ●MRA北欧チーム、エストニア訪問 ●MRA国際チーム、ウガンダ訪問
五月	●関西月例会	●バルト沿岸諸国会議（スウェーデン） ●ナイロビMRA会議（ケニヤ）
六月	●東京月例会「コー円卓会議華南報告会」	●MRAアジアチーム、インドネシア訪問 ●リッチモンド国際都市問題会議（アメリカ） ●汎アフリカ会議（カメルーン）
七月～八月	●関西月例会 ●第二十六回コー円卓会議ミーティング ●第四回アジア・太平洋青年キャンプ（香港・中国）に代表参加 ●第四十七回MRAコー世界大会に代表参加	●MRA国際音楽家会議（ポーランド） ●MRAヨーロッパ青年キャンプ（ポーランド） ●第四回アジア・太平洋青年キャンプ（香港・中国） ●MRA国際チーム、上海訪問 ●第四十七回MRAコー世界大会（スイス）
九月	●東京月例会「MRA国際会議報告会」	●国際コミュニケーション・フォーラム（ロシア） ●台湾MRAシングアウトグループ、上海公演（中国）
十月	●第十七回MRA日本キャンペーン ●第十六回関西秋季大会	●イギリスMRAグループ、三回目の中国訪問（中国）
十一月	●関西月例会「とにかく知ってもらいたい国カンボジア」（講師　フォトジャーナリスト　大石芳野氏） ●第二十七回コー円卓会議ミーティング	●国際連絡調整会議（キプロス） ●MRA国際チーム、レバノン訪問
十二月	●関西月例会 ●第十九回通常総会 MRAダイアローグ（ゲスト　尾崎行雄記念財団副理事長　相馬雪香氏）	●MRAキャンベラ・セミナー（オーストラリア） ●MRA青年海岸キャンプ（オーストラリア） ●コー冬季大会（スイス）

て、色々な人々から学び、中国の人たちが環境問題や社会をより良くするための意識を高められるような方法を学びたい」と述べた。

この後、現在東京大学の大学院でアジア各国の保健制度を研究中のスマナ・バルア氏（バングラデッシュ）は、これまで、フィリピンやバングラデッシュなどで取り組んできた地域医療向上のためのプロジェクトについてスライドを交えながら次のように話してくれた。

「子供の時に、自分の村で妊婦が出産の時に亡くなってしまった。それが、将来医者になろうという決心をするきっかけになった。十七年前に日本に来て、アルバイトをしながら日本語を学び、学費を貯め、その後、フィリピンに行って医学を学んだ。その間に日本人の依頼でレイテ島のある村で教育のため日本の学生たちを受け入れてもらうプロジェクトのアレンジをした。戦争の傷跡の多く残るレイテ島のこの村でも、準備に行った私にある老人が、『自分の父親は自分の目の前で日本人に殺され、孤児となった私は本当に苦労した。日本人の顔など見たくもない』と言った。この言葉にくじけず、何日も粘り強く説得した結果、『分かった。戦争は戦争。新しく友だちになろう』とついに言ってくれた。日本もアジアの一つの国であり、兄弟である。どうかアジアにもっと目を向けて欲しい」。

アジアに求められる憎しみや恨みの克服

二日目も朝の全体会議から始まった。韓国外国語大学でアラブ文化を教える閔丙華氏は、「学生時代は熱心にMRAの活動をしていたが、その後、兵役を経て学究生活に入り、MRAの活動を離れてしまった。しかし、MRAの四つの道義標準が自分の心から離れることはなかった」と述べ、更に、「アジアは悲しい歴史を共有しているが、憎しみや恨みを克服する必要がある。こうした過去の感情を将来も引きずっていくべきなのか。何のために？　答えは否である。この会議でお互い〝変わる〟ということを言し合おう」と提案した。

また、ミャンマーのビジネスマンであるキョウ・ウィン・トン氏は、日本で設立した会社で雇用した日本人社員とのトラブルに言及し、「裁判をすれば勝てることは確信していたが、ことを荒立てず、忍耐力を以て彼を許すことにし、話し合いでの解決の道を探っている。このような考え方をすることができるようになったのも、MRAから学んだ価値観からである」と述べた。

静かな時を持つ大切さ

午後には、『世界に平和をもたらすために私たちにできること』のテーマで分科会が開かれ、夕食後には恒例の『文化の夕べ』が開催された。台湾と中国の参加者が一緒に中国の歌を合唱したのを初め、マレーシア、韓国等々の歌が続いたが、圧巻だったのは、前述ミャンマーのウィン・トン氏による本格的なミャンマー民族舞踊であった。また、本年も伊藤乃ぶ子（花柳由女）さんの素晴らしい日舞舞踊が花

●韓国の閔丙華氏

●バングラデッシュのスマナ・バルア氏

を添えてくれ、また、伊藤さんの指導で炭坑節の楽しい輪が拡がった。

三日目は、『政治と社会の浄化を進めるためには何が必要か』のテーマで分科会が開かれた後、午後には最後の全体会議が開かれた。

二回の分科会のまとめとして埼玉国際交流語学院の榊たか子理事長は、「世界の平和も、政治や社会の浄化も、結局は私たち一人ひとりが変わるように努力することに尽きる。組織は人が動かすのであり、一人ひとりの決意と行が大切である。過去の歴史をしっかりと知り、認め、新しい時代に向かって力を併せて、宇宙規模で考え各国が力を併せて地球を守るため全力を尽くすことが必要」と述べた。

●伊藤乃ぶ子さんの指導で炭坑節を踊る

また、三十数年振りにMRAの会議に参加された小田原市議会議員の今井英龍氏は、「三十年以上前のMRAの体験が身に染みている。この三日間の会議を通じて、さらに正直に私欲を抜いて社会のために尽くすことの大切さを感じた」と述べた。

続いて、国際開発センターに勤務する飯島亜由子さんは、「大学生の時、台湾で開かれたMRA国際青年キャンプに参加して、そこで台湾の女性から日本人が嫌いといわれ、ショックを受けた。そういう人たちのために何か出来ないだろうかと考えて、今の仕事を選んだ。研修で来るパキスタン人がインド人を嫌っているのを知った。国同士が憎しみ合うから個人同士も憎しみ合うというのには疑問を感じた。日本人としてというのではなく、世界の中で憎しみ合う人たちのために何か橋渡しが出来ればと思う。また、自分の世代が異なった民族の人たちに悪い感情を持たずにすむように育てていきたい。仕事の忙しさにかまけず、静かな時間を持って、自分が何をしていくべきかを探っていきたい」と述べた。

また、会議にも全て参加されたアジアセンターIODAWARA所長の中山啓介氏は、「三十一年前に、日本は勿論、世界中のMRAの方々から心を寄せて頂き、このアジアセンターが出来た。こうしてMRAの会議で皆さんをお迎えでき、建物も喜んでいると感じる。このアジアセンターが、アジアは勿論、世界の人々との、また、地域に根を下ろした出会いの場所として使命を果たせるようにしていきたい」と述べた。

最後にパトリック・サンタマリア氏が、「この会議で話し合った内容は忘れて頂いても構わないが、静かな時間を持つということだけは忘れないで欲しい。静かな時間を持つこと、反省すること、瞑想することを通じて、MRAの人であろうとなかろうと一緒になれる。静かな時間を持って、浮かんだ考えを書き留め、それを実行することが大切。MRAとは理念を行動に移すということで、行動が無ければ、理念は力を失ってしまう。忙しい人は、静かな時間を五分でも十分でも持つことから始めてほしい。もし忙し過ぎるようだったら、逆に二十分か三十分持って下さい」と述べた。

●民族舞踊を披露するミャンマーのキョウ・ウイン・トン氏

小田原会議を終えた翌日、海外のゲストは箱根を訪れたが、秋晴れの好天気にも恵まれ、富士山もはっきりと眺めることができた。続いての浦和の訪問で

は埼玉国際交流語学院での中国人就学生たちの日本語の勉強の様子を見学したのを初め、岩槻市の東玉で日本人形の美に触れ、また、埼玉園芸市場への訪問では、大野社長から日本の花市場の説明を受けたり、美しい花の咲き誇る温室等を案内して頂いた。また、国産工業社長北口さんのお宅でのホームステイも体験でき、日本への理解を一層深めることができたと好評であった。三十日の東京での最後の集会を終え、海外のゲストは帰国の途に就いた。今回のキャンペーンでお世話になった多くの方々に心からの感謝の意を表しながら、このレポートを終えたい。

●会議の合間には体操でリラックス

●70名以上が参加した小田原国際会議

MRAビデオのご案内

日本語吹替版
(VHS/ベータ)

明日を愛するがゆえに

——イレーヌ・ロー夫人の生涯——

頒価 5,000円
(郵送料サービス)

ドイツを仲間外れにして
ヨーロッパの再建ができますか?

独仏の歴史的和解は勇気ある
人々により始められ後のEC
設立の礎となった。

好評頒布中!

●イレーヌ・ロー

1898年生まれ。第二次大戦中、反ナチ抵抗運動の医療班を組織して闘った。三男をゲシュタポに拷問され、フランス人そして母親としてドイツとドイツ人を心から憎んだ。戦後間もなくスイスのMRA世界大会に参加したが、ドイツ人がいるのを見て直ちに帰ろうとした。しかし、ブックマン博士に「ドイツ人を除外してどうしてヨーロッパの融合と再建が出来るのか」と説得され、三日三晩寝ずに悩んだ末、ドイツ人を許し憎しみを謝罪した。その後、独仏間の関係改善に尽力し、後のEC設立のきっかけを作った。マルセーユ選出の国会議員や仏社会党中央執行委員等も務め、世界各国を訪れ融和を説いた。1987年、88歳で没する。

お申し込みは
MRA事務局へ 03(3821)3737

来るべき新しい社会に必要な基本理念

＝分科会Ｃに参加して＝

地球防衛協会　大森　覚道

去る十月二十二日から二十四日まで、第十七回ＭＲＡ国際会議がアジアセンターＯＤＡＷＡＲＡで開催されました。私が参加した分科会Ｃでの皆様のご発言と、私の発言を通して感じたことを、私なりにまとめてみたいと思います。

大きな流れの根底にあるもの

今や人類は大きな方向転換期にありますが、その大きな流れの底流は、二十一世紀への人類の生き残りのかかった現代文明の根元的な誤りを正すための、静かにして、しかし止めることの出来ない、大きな流れであると考えます。即ち、今日まで、私たち人類は有限の地球を無限と考え、経済成長第一主義に走り、天地の道理を無視して資源を使い捨て、公害を発生させ、地球生態系を破壊してまいりました。今後ともこの方向を進むならば、人類の滅亡は、火を見るより明らかとなってまいりました。

しかし、その抜本的な対策が立たず、いずれの方向に進むべきか迷っているのが現状であると思います。

従いまして、新しい潮流を作るためには、先ず「危機の本質は何であるか」を確認し、次に、その「抜本的な対策はいかにすべきか」を究明し、しかる後に「実現可能な方法と手順を考え」、自分の身の回りから、自分の力で出来ることを、急がず焦らず、一歩一歩大地を踏みしめながら確実に前進することが大切であると思います。

来るべき社会は「自然順応生成発展型社会」

現代の危機の本質は何か。それは人類の二つの大きな誤りにあると考えます。

第一が、有限の地球を無限と誤認したこと。

第二が、人類が自然生態系の一員であり、自然の恵みによって「生かされている」事実を見落としたことであると思います。

この二つの誤りが、絡み合って様々な危機が発生していると考えます。その最大のものが、経済成長即人間の幸福と考え、天地の道理を無視して、自然を収奪し、資源使い捨ての「自然破壊の滅亡型社会」を形成したことです。

従って、来るべき社会は、人類は自然生態系の一員として、天地の道理に従って、自然の生成力を増殖しながら、その余剰資源を自然の調和を乱さない範囲内において人生が営まれ社会が活動する「自然順応の生成発展型社会」に改めて、人間が他の生命と共に生きる新しい社会に進化向上せねばならないと考えます。

「絶対愛」による社会の変革

では、そのような社会をどのような方法と手順を以て実現出来るでしょうか。それには、私たちがＭＲＡの「絶対の愛」に目覚めることが第一歩であると考えます。

絶対愛とは最高の愛であると考えます。即ち、愛は低い次元の愛から高い次元の愛へ進化向上することによって、初めて地上に本当の平和が訪れると思います。

人間は誰でも生まれた時から、自分が生きようとする本能的な「自己愛」があります。やがて、父母を敬い兄弟を労わる「家族愛」に進み、知識の向上と共に「民族愛」に、さらに「人類愛」に進む時、この世から戦争は消滅するでしょう。しかし、二十一世紀を迎えるためには、さらに一歩前進して、全ての生命をいとおしむ「慈悲の愛」にまで

進化向上し、人類が自分を生かしてくれる他の生命に感謝の誠を捧げ、他の生命と共に生きようと考える「基本理念」を形成することが、来るべき新しい社会の根底であると思います。

このような「基本理念」に立って、この視点から先ず教育を正し、正しい人生観、労働観を確立する時、正しい資本観が生まれ、今日までの「最も少ない労力を以て、最大の利益を獲得しようとする現代資本主義の体質」が改められ、全ての人の幸福を実現したいとの願いを込めた正しい経済、「経世済民」の新しい経済体制が確立されるでしょう。

人類の過去を省みれば、初めは力の強い者が勝つテイク・アンド・テイクの「力の論理」の海賊経済から、次には損得打算の上手なギブ・アンド・テイクの「打算の論理」の第二経済に進み、それが今や行き詰まって「慈悲の論理」、ギブ・アンド・ギブの第三経済に進化向上する過渡期であると考えます。

「朝顔につるべ取られて貰い水」をする、やさしい心を根底とした経済社会へと人類の大きな潮流が変わりつつあると思います。

先ず自分に出来ることから始める

この「新しい時代の潮流を作る」前提となるのが、「絶対愛」を行動原理とするMRAの使命であると思います。私はMRAの会員であると共に日本人であり、鎌倉に住んでおりますから、「いざ鎌倉」の合い言葉のように、鎌倉からこの潮流の源流を発したいとの願いを込めて、私財を投じつつささやかな運動を二十年間続けてまいりました。私の力で出来る方法として、鎌倉駅の上りホームの中央・グリーン車の乗車位置から見える民家の屋上を借り、横十メートルの掲示板を設置して、私の考えを訴え続けてまいりました。

その究極の願いとするところは、日本が先ず目覚めて、打算の論理から愛の論理に、さらに進んで、慈悲の論理まで進化向上して、

自然を収奪することなく、他国の富を奪うことなく、日本●島に降り注ぐ自然の恵み、空気と水と太陽の光を、近代科学技術を以て有効に活用し、無限の富を生成し、すべての物を循環活用して、天地と共に生成発展する、真（神）理の国を実現し、進んで世界の平和と、人類の「しあわせ」のために、絶対愛と絶対の無私の心境で、奉仕する「道義大国」になって貰いたいということです。このような大いなる願いを胸の奥深くに抱きつつ、何気なく近隣の人のために、自分で出来ることをしております。そして常に、向こう三軒両隣が仲良くなることが世界平和の第一歩であり、「新しい時代の潮流を作るため」の一雫であると思います。このような小さな一雫でも集まればやがて、「さみだれを集めて早し最上川」の句のように、大いなる流れになると信じます。（終）

大森氏が鎌倉駅頭の掲示板に書かれた原稿をご希望の方はお申し込み下されば進呈いたします。（事務局）

入会のご案内

(1)正会員　個人　年額　6、000円
　　法人　年額　50、000円

(2)賛助会員　個人　年額　3、000円以上
　　法人　年額　50、000円以上

郵便振替口座
東京八―三八二八九
口座名　社団法人
国際MRA日本協会

会員の皆様には、①内外のMRA国際会議やレセプションなどに参加して外国の方々と交流していただく機会の提供、②機関誌「MAJニュース等の送付、③講演会、月例会等のご案内を行なっています。

●世界家族の仲間入り
●信頼できる人との出合い
●新時代に必要な情報
●心身の健康
●問題解決の秘訣

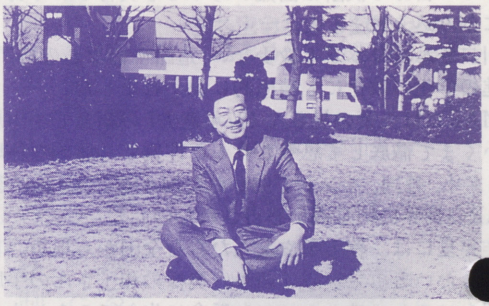
事業の拡大と事務局基盤整備のために特別協力年会費制度一口50、000円（寄付扱い・年額）を設けました。ご協力頂ける方は資料を事務局までご請求下さい。

郵便振替口座番号
東京五―四一三六六五
口座名：社団法人国際MRA日本協会特別協力年会費

「生きるということ……」

＝新成人へのメッセージ＝

川口 昌宏



日本大学理工学部教授、そして弊協会理事の川口昌宏氏は、さる1月11日に逝去（享年56才）されました。謹んでご冥福をお祈りします。遺稿となった1月15日に予定されていた国立市の成人式での記念講演の原稿を掲載させて頂きました。

はじめに・・・人間の一生

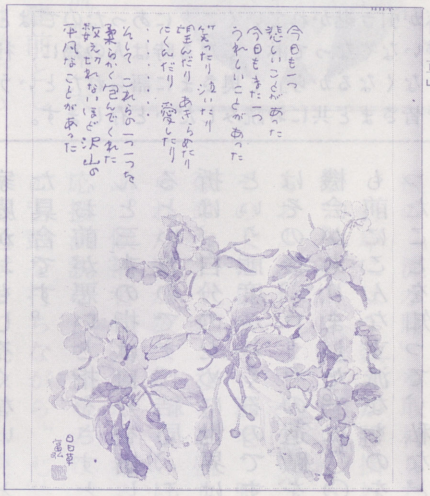
人間の一生は春（成長、学習）、夏（労働、家庭、社会）、秋（迷い）、冬（死）にたとえることができます。しかし、春夏秋冬の季節は突然の死によって終わることが多いのです。病気と事故です。私は今五十六歳。子供のころから健康で高校までほとんど休んだことがありませんのに、原因不明の白血病になりました。昨年の八月にあと一ヵ月プラスαと言われたのですが、半年たってなんとか生きています。（一九九四年一月八日書）

二十歳の皆さん、皆さんもいつかは死にます。暗い気持ちになりますか。いつか終わる命と思えば、生きていることがほんとうにいとおしくなりませんか。そして、この与えられた時間、人生をどのように生きるか、今日、一人になったら、まだ先が長いので、ゆっくり考えてくださるでしょう。

①春から夏へ・・・人生のヒント　学ぶ

星野富弘さんの詩と絵は多くの人に感動を与えます。彼は体操の先生でしたが回転に失敗して首を折り、ほとんどの筋肉が動かなくなりました。しかし、口に筆をくわえて（横向きで）絵を書く技術を身につけました。大変な努力です。

彼の作品を集めた美術館で、彼が口に筆をくわえて書き始めた頃の字を見て、字が何も読めないことに胸をつかれました。彼はここから始めたのです。皆さんの多くはまだ学校に在学中でしょう。また、そうじゃない方も表面的ではなく、本当に人生の力になる基礎を貪欲に勉強されたらいかがでしょう。人間の可能性はどこにあるか分かりません。



「日日草」

©《花の詩画集》「鈴の鳴る道」星野富弘　偕成社刊より

②結婚

結婚もこの時期の大きなテーマです。私はとても魅力的な妻になる人に恋をしましたが、彼女は世間的にみるといろいろ難しいことがありました。年齢が六歳上、病気をしたので子供ができないであろうということです。私はとても常識的な家庭に育ったのでこれは大問題でした。そして、つくづく、人を愛するということは、その人の一切を自分のものとして受け入れることだとわかりました。

皆さん、ぼんやりした気持ちで結婚してはいけません。相手をやはり一回きりの人生しかないいとおしい人として受け入れて下さい。はなはだ残念ですが、人間の心はいいかげんで、一度の決心でもう大丈夫とはいかないのですね。

③家庭のゆがみからの独立

私たちは家庭で人生の基礎を与えられます。考え方は家庭というより両親が相当規定しています。私の母は社会に対して劣等感を持っていたように思いま

す。そのため、点数による競争にこだわっていました。ですから、私は中高生時代、競争意識のため、友だちを作れず孤独な時期がありました。母から遠く離れたせいもあって、大学では親友ができました。

私たちが知らず知らず両親の枠に規定されてしまっていることをどうして知り、そこから自由になれるのでしょう。それは、やはり他人との交わりの中でわかってくるのです。「道を知るは衆縁による」という道元の言葉は深い真理です。私の難民救援活動の友人の一人は、「体を風にさらしてアジアを歩いてごらん」と言いました。これは強烈です。

④仕事と挫折、そして新生

生活のために人は働かなければなりません。しかし、仕事にはそれ以上の意味があります。仕事を通じて私たちは社会と連帯でき、自分の存在の意味を知ることができます。

さて、仕事をして行きづまることがあります。若いとき私は自分の論文が受賞候補になり、決選で落ちてから目標を失いました。そして、周囲を責めました。私の大学は研究施設が不十分なのだとか、学生が手間がかかってしようがない、はては、家庭がおもしろくない、といった具合です。

お前が悪いと指をさすと、なんと三本の指は自分を指しているというのです。結局、この挫折は、自分のために世界はあるという態度からくるのです。私はその後、ローマの遺蹟を見る機会がありました。二〇〇〇年も前にこんな立派なものをつくったことを知って、私などいてもいなくてもよい存[illegible]なんだと感じ、一度に挫折から立ち直ることができました。つまり、挫折は自分のごうまんさから生まれます。しかし、そのごうまんさに気付き、自分を見直し、勇気をもって自分の壁をくずすこと（チェンジ）によって、失敗しても、恐ろしくない謙虚な自分が生まれるのです。

皆さんはご両親からかなりちやほやと育てられているでしょうから、私のように挫折を体験することでしょう。でも、そのたびに謙虚に自分を振り返り、世界は自分のためにあるという考え方ではなく、私は世界のためにある、という心で成長してください。あなたができることは、職場、家庭、地域、国、地球にいっぱいあるのです。「私は世界のために」の心意気で仕事をしていったら、いつ死がやってきてもあなたの後悔は少ないことでしょう。

あなたを広い世界が待っています。二十代、三十代はほとんど病気の心配はありません。どんどん働き、活動して下さい。

本日は、御成人おめでとうございました。

（終）

「川口昌宏さんを偲んで」㈳国際MRA日本協会副会長　相馬　雪香

川口さんに初めてお目にかかったのは、1980年のバンコクでした。長引いたベトナム戦争がアメリカの敗北に終わり、多くの難民が国外に逃れた1975年に続いて、カンボジアにポルポト政権が誕生し、徹底した社会改革政策の下で、首都プノンペンから大々的な下放が行なわれ、タイの国境に万を数える難民の群が殺到した頃でした。

当時、日本の国内での一般世論は、というよりは声の大きい人たちが反米に傾き、難民に対する同情など一切聞こえず、「日本人は冷たい」との声も出始めていました。そうした誤解を解く為にも何とかしなければと、心を通じる人たちの力を得て、「難民を助ける会」を作ろうとしていた時、難民のことを積極的に考えておられる珍しい方がバンコクにおられると聞き、川口さんをお尋ねしました。人を思い遣る温かいお心を持ち、よく検討した上でのご自分の決断は困難があっても実行される勇気をお持ちの方だという初印象が深く心に刻み込まれました。

川口さんは日本でも数少ない、道路や橋などの専門家として研究成果をあげられる一方、後進の学生の教化にも積極的に動かれました。

MARには先妻の晃さん（87年逝去）の紹介で小田原の国際会議に参加されて以来、納得のいくまで徹底して思考されるご性質で具体的な体験を積みながら、国内の会合はもとより、タイ、韓国、インドで開かれたMAR国際会議に参加され、数多くの友情を育みながら、MARの世界史的意義を感得されたのでした。

昨年夏には、教え子や友人たちを全国から集め、自らの病を告げ、残された時間を精一杯[illegible]たいと勇気を以て語り、奥様の和子さんの手厚い看護と愛情にも支えられ、医者の予想をはるかに越える日々を懸命に生きてこられました。1月15日の成人の日には、国立市で「生きるということ…新成人へのメッセージ」というテーマで講演される予定で、亡くなられる直前までベッドの上で入念に準備されていたということです。また3月12日に開かれた「偲ぶ会」には六百人を越える人々が集まりましたが、そこで川口さんが望まれたことは、ただ故人を偲ぶことではなく、自らが示された積極的な「生き方」を伝え、そのお志が引き継がれていくことにあったのではと拝察いたします。

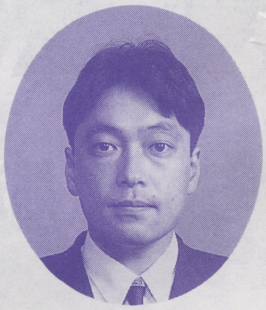
「私がいなくなって淋しくなる時は人の為に、社会の為にお役に立ちなさい。そうすれば淋しくなくなるから」と奥さまに語られたという珠玉の言葉を胸に、川口さんの遺された玉稿を皆さまと共にお読みしたいと存じます。

海外レポート

台湾選挙浄化運動を取材して

―自ら立ち上がり政治を変えようとする有権者たち―

松下政経塾研究員
小野寺　五典



昨年十一月二十七日に投票された台湾の県長（知事）市長選挙の選挙運動の驚くべき光景を先ず見てほしい。

写真①と②は、選挙期間中に候補者が数万人単位の有権者に食事を振る舞う圧巻「流水席（大食事会）」である。一応建前としては会費制だが、実際は誰でも参加できる。今回私は、台南市の中心部に位置する片側三車線の中正路を通行止めにして、一六〇〇席が設けられ二万人規模の「流水席」を取材した。

●2万人流水席のために片側3車線の道路に並べられた1600テーブル

●豪華な料理にみんなで舌鼓

各卓には十数人が腰掛けられる。歩道には長さ百メートルにもおよぶ長テーブルが並べられ、その上には牛肉、海老、野菜、豪華なデザートなどが盛り付けられた皿が数え切れないほど並ぶ。候補者の挨拶が終わると、応援演説などそっちのけで料理に舌鼓を打ちながら、七時から十時過ぎまで流水席は続いた。

このような流水席は各候補者によって連夜行われている。そんなわけで選挙期間中は台湾名物の屋台も商売にならないのか、閉店しているところも多い。

今回の選挙は十八県の県長と五市の市長という、地方自治体の首長を選ぶだけに市民の反応も鋭い。一昨年の中選挙区による国会議員選挙と異なり、選挙区内で一人を選ぶとあって選挙戦はエスカレートしている。

制度改革だけでは政治浄化は実現しない

このような台湾の選挙状況を有権者の側から変えようと、九二年から国際MRA台湾協会の主導で民間のボランティア団体による「政治浄化運動」が始められた。

今回は地方選挙ということもあり、組織を全国展開した。台湾MRA協会を本部に全国十八ヵ所（二十選挙区）に支部を設け、各支部ごとに活動することとした。組織名は「全国選挙浄化推進委員会」。会長は人格者として有名な柴松林中興大学教授、実行委員会は一昨年と同じ劉仁州氏（台湾MRA協会秘書長）であった。

今回の運動は立候補者および買収の仲介者である里長・村長に「買収を行なわない」という宣言書を送付、署名してもらう手法をとった。前回の署名から一年も経たないため、有権者全体に対する署名活動にはしなかった。立候補者には前回同様、承諾書により「買収行為を行なわない」ことを宣誓させた。

立候補者七十七人中五十人が署名に応じたものの、残念なことに里長・村長のうち署名したのは四％足らずで、買収が日常化している証拠と劉氏は指摘する。

各政党にも署名を求めた。台湾には現在、与党「国民党」、野党「民進党」、昨年国民党から分裂した「新党」がある。これらの党首あるいは幹事長が「買収などの選挙違反をした候補は永久に除名する。また、買収が発覚した場合、党の幹部も辞任する」との宣誓書に署名した。

宣誓した候補の氏名は数度にわたり新聞で報道。また、投票日当日の朝刊にも宣誓候補の名が掲載された。各政党の「買収議員を永久追放する」との署名用紙はそのまま新聞に掲載された。

結果は国民党の候補十三人が当選。野党の当選者は民進党六人、無所属二人の八人にとどまり、引き続き国民党が過半数を押さえた。残念なことに署名に応じ当選した候補にも「買収の噂」が聞かれた。

全候補が署名した台南市で当選した現職は、地区により有権者一人あたり三千元（一万三千円）から五百元（約二千円）で買収したと噂されている。

浄化運動の実行責任者である劉氏は、「私たちの全国選挙浄化推進委員会は今年の県議会・市議会議員選挙、村・里長選挙、台湾省長選挙、そして来る台湾総統選挙まで継続して活動します。政治浄化は有権者の意識改革です。時間はかかりますが、継続すれば必ず実現します」と言う。

確かに現状の台湾の選挙買収は日本よりひどいかもしれない。

●実行委員長の劉仁州氏（台湾MRA協会秘書長）

しかし、台湾では有権者が自ら政治の姿を変えようとしている。政治改革を政治家だけに任せ、投票にすら行かない有権者が増えている日本とは大違いだ。

「有権者の意識が変わらなければ、どんな選挙制度に変えても政治浄化は実現しない」。そんな感想を強く持った今回の取材だった。

●選挙前夜のキャンペーンに参加する小野寺氏（右）

事務所近況

●「台湾選挙浄化運動」TV放映

三月一日のTV朝日ニュースステーションは、一昨年から台湾MARの主導で行われている選挙浄化運動を「一枚の署名用紙―台湾選挙腐敗防止の試み」と題して特集し、運動の責任者である台湾MAR協会の劉仁州秘書長らの奮闘振りが茶の間に伝えられました。

●第二十回通常総会開催

去る三月五日、第二十回通常総会が全郵政会館で開催され、平成五年度事業報告及び決算報告が満場一致で承認されました。その後行われた講演会では、前出の劉仁州氏と同氏らの運動のきっかけとなったオーストラリア、クイーンズランド州の市民キャンペーン「汚職なきクイーンズランド州を目指す私たちの決心」の推進者の一人であるブライアン・ライトーラー氏が、それぞれの運動の背景やビジョン、そして今後の抱負などを熱っぽく語ってくれました。

●スタディコース便り

オーストラリアで行われている第二十回MAR国際青年育成スタディーコースに日本からも加藤保之さん（二十三才）が大阪より参加しています。

●四月の月例会は四月二十五日（月）午後六時半より全郵政会館（千駄ヶ谷）で。テーマは「MARカンボジア国際セミナー」。